
少女たちの甘い陰謀

NACONO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少女たちの甘い陰謀

【Nコード】

N3309Z

【作者名】

NACONO

【あらすじ】

W学園家庭科部のハンガリー、ベルギー、台湾、そしてセーシェル。彼女たちは部長のハンガリーの思い付きから、ある計画を実行に移す。その内容はアイスランドを……！？アイス君大好きな作者がずっと書いてみたかったネタの一つを小説にしてみました。

(前書き)

当初考えてたより長いです。そのせいか読みにくいかもしれないです。

今、W学園の家庭科室はちょっとした騒ぎになっていた。

「あ、あの可愛い子誰？W学園の生徒！？」

声をあげたのは、淡い茶色の長髪をした少女、ハンガリー。家庭科部の部長を務めている彼女が、窓から身を乗り出して叫んだ。

「いや、違うんじゃない……制服着てへんし」

金色のセミロングに緑色のリボンをつけたベルギーも続いて、ハンガリーと同じ方を見た。

二人の視線の先にいたのは、肩に黒い鳥を乗せ、冷たい雰囲気をつ人物。銀色の短髪に朱色の上着とズボン、中に着た白いシャツには、リボンのような物が前で結ばれている。

「あれはノルウェー？」

その人物の所に、誰かが歩いてきた。それはベルギーのよく知る人物。不思議な巻き毛がついた薄い金色の短髪に濃い青色の目をした少年、彼がこのW学園の生徒であるノルウェーだ。いつも『見えないうナニカ』達と会話している不思議少年で、表情に乏しく素っ気ないが、そこが魅力だという隠れファンも多い。続いて入ってきた台湾と耳を澄ますと、二人の会話が聞こえてきた。

『おう、来たか』

『そつちが電話してきたんでしょ。トロルのエサ忘れたとか意味わかんない』

『これがねえど、あいつ拗ねちまうんだあ』

『あつそ、別にどうでもいいけど。じゃあねノーレ』

『……お兄ちゃんて呼べ』

『絶対言わない！』

「思い出したネ！あの子はアイスランド、ノルウェーの弟だヨ」
台湾が声を上げた。赤い花の髪飾りをつけた長い黒髪が揺れる。

「え、男の子!？」

「でもかわええやん!!」

その言葉にハンガリーは驚き、ベルギーは目を輝かせる。

「そうねえ、本当に女の子みたいで……」

ハンガリーはそこまで言っただけで何か考えるような顔をし、それからにやりと笑った。

「ねえ、いいこと思いついたんだけど」

そしてベルギーと台湾に、その『いいこと』を小声で提案する。

「遅くなりましたー!!」

しばらくして、もう一人の部員であるセーシエルが家庭科室に入ってきた。長い黒髪を、赤いリボンで二つに結っている。

「セーシエル、来たばかりで悪いけど、これを探してきて!部長命令よー!」

ハンガリーは何か書かれた紙を、セーシエルに渡す。セーシエルは戸惑いつつも了解し、部室を飛び出した。

「銀髪のロングヘアウィッグなんて、何に使うのかなあ……」

セーシエルは首をかしげながら、外へ走っていく。

その翌日、再びW学園の家庭科室。

「やっぱり私の目に狂いはなかったわ」

「かつわかわええやん!!」

そう叫ぶハンガリーとベルギーの視線の先には、銀色のロングヘアをなびかせ、朱色の上着にリボンがついた白いシャツ、白いフレアマニスカートに白いブーツをはいた一人の少女が立っていた。

「何これ……意味わかんない……」

「大丈夫、アイスランド c a w a i i z o ー！」

「はー、結構映えるもんですね」

台湾とセーシェルも、そんな彼女、否女装したアイスランドを感心したように見つめていた。アイスランドは顔を真っ赤にし、スカートを押さえて震えている。

「聞きたいことがありますよ。まず何でこんなことさせてるの？僕は、ノーレからメールもらってここに来たんだけど？」

「いや、一目見たときから、こういうの似合いそうだって思ったのよ。それでベルギーに貴方のお兄さんを装ってメール送らせて呼び出して、私と台湾で気絶させてここまで運んだの」

ハンガリーが満足そうに笑う。

「それ、ちょっとした誘拐じゃん……ってというか、どうやってノーレの携帯使ったの？」

「デンマークの弱点と引き換えに借してくれたんよ。まあノルウェーには家に電話って言っといたし、送信履歴も消しといたから安心してな」

「そういう問題じゃないし。あとダンで釣ったの！？」

笑顔で答えるベルギーに、アイスランドは混乱するばかりだった。

「で？もう気は済んだでしょ？早く着替えさせてほしいんだけど」

「えー、もう？徹夜で考えたコーデイナートなのに」

「このために私、ウィッグ探して走り回ったんすよ！？」

不機嫌な顔をするアイスランドに、ハンガリーとセーシェルが反論する。

「せめて写真撮らせたって！勿体ないわ」

「……まあ、それ位なら」

携帯電話片手に興奮するベルギーの申し出を、渋々了承するアイスランド。すると彼女は即座に撮影ボタンを押す。しかし悪夢はこれで終わらなかつた。

「うーん、他にも似合う服がありそうなの……」

台湾が残念そうな顔をした時だった。

「そや！先月作ったワンピースとかいいんちゃう？」
「思い切ってドレスとか着せるのは？」
「いつそ頭もやっちゃいましょうよ！」
「それなら、この間作ったヘッドドレスがあるヨ！」
彼女たちのトークが再燃してしまったのだ。アイスランドは素早くウィッグを外し、スカートを脱いで逃げ出そうとしたが、首の後ろにハンガリーのチョップを喰らい、気絶してしまった。

「最悪……」

アイスランドはハンガリー達の後ろに隠れながら、廊下を歩いていた。その格好はというと、水色のワンピースに白いブーツを履き、銀色の長い髪には水色のリボンがついているという具合である。さらに四人が、折角だから皆がどんな反応をするか試したいと言い出し、強引に連れ出されて今に至る。

どうか誰にも会いませんように、というアイスランドの願いは裏切られ、早速誰かに会ってしまった。

「あら皆さん、ごきげんよう」

向こうから歩いてきたのは、リヒテンシュタインだった。

「おや、そちらの方は？」

リヒテンシュタインの視線が、アイスランドの方に来た。彼が応答に迷っていると、

「私達の新しいお友達の……イスちゃんよ。ちょっとシャイなのよねー」

ハンガリーが代わりに答えた。

「まあ、イスさんとおっしゃるのですか、綺麗な方ですね……初めまして、私はリヒテンシュタインです」

「ど、どうも……」

アイスランドはとっさに裏声を出した。上手く出せた自信はなかつ

だが彼女は気づかないようだ。そしてイース「アイスランドということがばれないまま、彼等は一ヒテンシユタインと別れることができた。

「女子にもばれないなら、大丈夫つすよきつと！」
そしてこのことで、家庭科部四人は気分を良くした。

だが、その後が軽い地獄だったのだ。確かに正体こそばれなかったが、恐ろしいことの数々をアイスランドは身をもって体験することとなる。

「君可愛いねー！俺とシエスタするー？」

「イタリア君、いきなりそのようなことをしては失礼ですよ」

「そういう日本は、何でカメラを持ってるんだ？」

「あつ、それは……すみません、貴方があまりにもお美しかったので」

「ま、まあ確かに俺も美しいと思うが……」

(寒気がするんだけど……)

「そこの可愛い彼女ー！これからお兄さんと楽しいことしな〜い？」

「何言ってるんだ！俺様と行くよな！」

「こんな奴らほつといて、俺とデートでもせえへん？」

「何イースちゃんに触ってるのよ、この変態ども！！」

バコツ！ガキインツ！ガンツ！

「ぎゃあああああ！！」

「可愛い奴発見だぜ！俺と遊ぶんだぜ！」

「は？意味分かんないのな。俺の方がこいつよりいいに決まってるのな？」

「どっちもどっちネ！というかイースから離れるネ！！」

ドカッ！

「べ、別に俺は紳士として、正直な感想を言うだけだからな！お前
のこと気になってなんかいないんだからな……イース、綺麗だよ」

「よ、よかつたら俺と……やっぱ何でもねーよチクシヨー！！」

「貴方のような美しい方が、学園にいらっしやっただとは」

「オーストリアさんの視線がアイ、じゃなくてイースちゃんにいい！！！！」

「落ち着いてください、部長！」

「ふーん、見かけないけどなかなか綺麗な子じゃない」

……ギロリ

「ベラルーシが睨んどる！早よ行こ！」

「酷い目に遭ったんだけど」

アイスランドは明らかに不機嫌だった。

「あそこまでばれないとは……そろそろ着替えましようか」

家庭科部の四人も少し疲れたようで、この計画を終わらせることに
異論は出なかった。

しかし少しして、アイスランドが顔色を変えて立ち止まる。

「どうしたんすか？」

「遠回りしよ……これはまずい」

アイスランドの視線の先にいた人物を捉え、セーシエルそして他の
三人も少し焦った。

「フィンとスヴィーだ……絶対ばれる……」

急いで逆方向に走り出そうとしたアイスランドだが、時既に遅し。フィンランドがこちらに気付いたのだ。

「あれ、皆さんお揃いで……その子は？」

しかもアイスランドの方に視線が向いた。さらにはスウェーデンもこちらを見つめている。アイスランドは目を合わせるのを避けるため、少し俯いた。

「無理！流石にダメ！」

「大丈夫やって。リヒテンにもばれへんかったんやから」

「何年の付き合いだと思ってるの！？この程度の変装見破られるって！！」

スウェーデンは小声でベルギーと言い争うアイスランドをじっと見ていたが、急に一言、

「すごく、めんげえ」

そう言った。

「そうっすよねー！イスちゃん良かったじゃないっすか！」

セーシエルが笑って咄嗟にごまかす。他の三人もそれに続いた。

「へえ、イスちゃんかあ。僕もそう思うよ」

フィンランドが笑いかけてきたが、アイスランドの気持ちは複雑だった。

（気付かないだけじゃなく、可愛いって……フィンもスヴィーも意味分かんない）

「じゃあ、私達これで」

五人が二人と別れようとした時だった。

「あれ、フィンランドじゃないか」

フィンランドに声をかけたのはエストニア。優等生の彼には流石に見破られるのではないかとアイスランドは固まった。

だが彼の予想は、意外な形で外れた。

「あれ、綺麗な子だね」

「ハンガリーさん達の友達だって。イスちゃんっていうらしいよ」
「イスさんか……初めまして。僕はエストニア、フィンランドとは友達です。以後お見知り置きを」

「はあ……」

エストニアがかなりの決め顔（少なくとも自分ではそう思っているであろう）をしてきたが、格好つけてるのが見え見えでアイスランドは少し引いてしまった。

「むー、エストニアだけ抜け駆けとか許さんしー」

「うわ、綺麗な子……でも俺にはベラルーシちゃんがああ……」

「ぼ、僕ラトビアっていいいます。よかつたら友達に……」

そこにポーランドとリトアニア、ラトビアまでやって来た。ポーランドはエストニアに突っ掛かっていき、リトアニアは一人で叫び、ラトビアは頬を赤らめる始末だ。

「……………」

この状況のある者は苦笑、ある者は呆れ顔をしながらただ見ていた。

やっこのことで家庭科室に戻って来た五人。アイスランドがウィッグを外し、着替え始めた時、最大の危機が訪れた。

「ベルギー、あれ嘘だったべ……」

「可愛い奴、ここにいるっペー!?!」

その声を聞いて全員が固まる。

「ダン……!ノーレまで……!?!」

アイスランドが青ざめていると、急にハンガリーと台湾が立ち上がった。

「一番面倒なのが来た……ベルギー、セーシエル、アイス君を頼んだわ。行くわよ台湾」

「承知ネ!」

そしてデンマークとノルウェーの足音が近づくと、

「はあーっ!」

「ぐおっ!?!」

「ていっ!」

「!?!」

ハンガリーはデンマークの顔をフライパンで殴り付け、台湾はノルウエーの首の後ろにチヨップを食らわした。

「アイス君、今のうちに」

セーシエルは二人が気絶したのを見計らい、着替えが済んだアイスランドを窓から逃げさせた。ベルギーは女装に使ったウィッグと服を隠す。

「私達も退散するヨ」

さらに台湾に促され、家庭科部の四人も倒れているデンマークとノルウエーを残して家庭科室から出た。

こうして少女四人の甘い計画は幕を閉じたのだった。

しかし今回の一件は、新聞部によって『謎の美少女イース』という記事（日本の描いたイラスト付き）にされ、暫く学園内で話題になったという。

あれから一週間後。

《アイス君へ

この間は付き合わせちゃってごめんね!そしてありがとう!お詫びとお礼の品を同封しておきます。

p.s.でもフィンちゃんやスウェーデン、エストニアにもばれな

かったんだから、素質あるかもよ（笑）。

W 学園家庭科部一回》

そんな手紙がついた小包がアイスランドの元に届いた。中には彼女達の手作りと思われるクッキーとマドレーヌがある。アイスランドは追記の部分を読んで少し不快そうな顔をしたが、

「まあ、ダンとノーレから逃がしてくれた恩はあるしね……くれるっていうなら、貰っとくか。甘い物は嫌いじゃないし」
そう言って、少しだけ笑った。

(後書き)

因みにアイス君に声かけてたヘタキャラは順に、

枢軸三人 悪友三人 韓国&香港 イギリス ロマーノ オースト

リア ロシアです。バレバレだったかもしれませんが(・。・。 ;

最後まで読んでくださりありがとうございました!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3309z/>

少女たちの甘い陰謀

2011年12月11日13時47分発行